

※「日本髪用髪飾り」のつづき

根掛^{ねがけ}

根掛は、櫛、筥、簪と共に重要な日本髪の髪飾りであるが、今ではすっかり忘れられている。

日本髪を後頭部で束ねたところ（髻^{むすぶ}）の根元を結ぶように掛けた髪飾りで、根元に掛けるので根掛と呼ばれた。始まりは江戸時代末期『日本の宝飾文化史』図6-22）。明治期以降には、既婚女性の丸髻や未婚女性の島田髻などの髪型に広く用いられた（図1-8-54）。

日本髪では後ろ姿も重視され、女性たちは髪から襟足にかけての美しさにも気を配った。その特有の美意識が根掛という後ろからしか見えない装身具を発達させたのだろう。



図1-8-54

丸髻への根掛着用図

明治31年7月『都の華』より
髻の下にサンゴの玉根掛が見える。

根掛には玉を連ねた玉根掛と金属の彫金根掛、べっ甲根掛、セルロイド根掛といろいろな素材がある。最初に登場したのは玉根掛だが、大正期になると金や銀の根掛や新しい宝石（主に真珠）で飾った根掛も盛んに作られた。べっ甲根掛も大正期から始まったものだ



図 1-8-56

真珠入りK18 根掛

尚美堂

大正3年11月『尚美堂時報』より



図 1-8-55

金 (K20、K22、白金交り) 根掛

三越呉服店

大正3年『三越』付録「金銀細工帯留

と頭飾品目録」より

最初に、大正期に盛んになった金、銀、宝石根掛とべつ甲などの根掛を紹介し、次に玉根掛を紹介する。

図 1-8-55 は金根掛、図 1-8-56 は真珠を使った根掛。こうした根掛はその形状から時に腕輪（バングル型）と勘違いされることもあるが、実物は腕輪よりだいぶ小さいので実際のものを見ると違いは容易に分かる。

ろう。

根掛の止め方は割合に簡単。玉根掛の場合は連ねる紐を長めにとっておき、その他の根掛の場合は両サイドに小孔を開け、そこに紐をかけて髪に固定した。

ある。図1-8-60は金に半円真珠5個入り根掛。当時の最高級品根掛である。



図 1-8-59
銀に金線と螺鈿根掛
桜図



図 1-8-58
銀透かし根掛
かえで
楓 図

銀地に金線と螺鈿装飾の根掛。なかなかおしゃやれである。図1-8-59は



図 1-8-57
金透かし根掛
笹 図

図1-8-57は実物の金根掛。大切に保存されていたようでほとんど使った形跡がない。このように潰されずに残っている金根掛はあまりない。

として普及した。
図1-8-63は白甲を模したセルロイドの根掛。安価な大衆用根掛



図 1-8-62
べっ甲蒔絵螺鈿根掛
菊図



図 1-8-61
べっ甲根掛
菊図
白甲による上品な根掛。

したべっ甲の根掛。こうしたべっ甲根掛を好む女性も多かった。
図1-8-61はべっ甲（白甲）の根掛、図1-8-62は蒔絵螺鈿を施



図 1-8-60
金に半円真珠入り根掛



図 1-8-63
セルロイドの根掛
一見すると白べっ甲（白甲）
の根掛に見える。

次は、玉根掛。玉根掛の玉は、同時期の玉簪の玉の流行とほぼ連動していた。

この時代の玉根掛の主流は、明治後期と同じくサンゴとヒスイ。
図 1-8-64 は『日本の宝飾文化史』（図 9-40）でも紹介した明治後期〜昭和初期頃のサンゴとヒスイの玉根掛。

サンゴの根掛は時代によっての変化はあまりないが、大正前期には、玉簪と同様に桃色系のものが根掛にも用いられた。ヒスイは簪の玉には琅玕質のものもあったが、根掛用のもものは、以前と同じく白地に緑色が交ったものが一般的だった。



図 1-8-64
サンゴ（上）とヒスイ（下）の根掛

また、赤や桃色のサンゴ以外に、大正前期には図 1-8-65 のような白サンゴの根掛も、多少だが使われていたようだ。

その他、明治期以来のめのう(図1-8-68)や孔雀石(マラカイト)
(図1-8-69)の玉根掛を好む女性も少なくなかった。



図1-8-67
紫水晶(アメシスト)切子玉
の根掛
大正前期末以降のもの。



図1-8-66
水晶切子玉の根掛
涼しげな水晶は特に夏の根掛
として好まれた。

庶民的な宝石である水晶の根掛(図1-8-66)や紫水晶(アメシ
スト)の根掛(図1-8-67)も明治末頃から引き続き用いられた。



図1-8-65
白サンゴの根掛

図1-8-71は、ヒスイ人気の高まりに乗じて作られたガラスの模



図 1-8-70
セルロイド模造サンゴの根掛

以上の玉根掛は天然石だが、セルロイドやガラスの安価な模造サンゴ根掛も多い。またガラスの模造ヒスイの根掛も数多い。これらの模造石根掛はおそらく天然石の十倍以上作られていた。そのためか、現在、骨董市場で見られるサンゴ、ヒスイ根掛の十中八、九は模造品である。

図1-8-70はセルロイドの模造サンゴの根掛。明治期から作られているが大正期に入ると更に盛んに作られた。



図 1-8-69
孔雀石（マラカイト）の玉根掛



図 1-8-68
めのうの玉根掛



図 1-8-73
小粒ビーズ組み合わせ根掛

図 1-8-73 は、小粒ビーズを編んで作ったモダンな根掛。
『櫛・かんざし』（田村コレクション）⑧ではこの種のビーズ根掛
は幕末〜明治期のものとされているが、もう少し後の時代のもの
のように思える。ここでは大正前期頃のものとして紹介する。



図 1-8-72
模造ヒスイの玉根掛（天然石
風）



図 1-8-71
模造ヒスイの玉根掛（琅玕風）

造ヒスイを使った琅玕風根掛。^{ろうかん} 図 1-8-72 もガラスだが、こちらは
巧妙に作られていて天然の中級品ヒスイと見紛うほど。

たぼ留

日本髪用髪飾りの最後に「たぼ留」（「つと留」とも言う）も紹介しておく。

「たぼ留」については（B）「束髪用髪飾り」でも紹介したが、本来は日本髪の後方に張り出した鬘たぼの部分につける整髪を兼ねたクリップ式の装身具である。

図1-8-74はその着用姿。



図1-8-74

丸鬘への「たぼ留」着用姿

『大正のきもの』⁶⁹より
鬘の下方に、細長い「たぼ留」が見える。

日本髪へのたぼ留は明治二十年代中頃から用いられていて、明治

二十六年刊『東京百事流行案内』⁷⁰にはすでに「タボ止は鋼鉄製の最も細きものやはり流行す」と記録されている。また、明治三十九

年刊『日本家庭百科事彙』⁷¹には「鬘止タボドメ」として「護謨板ゴム（セルロイドのこと）或は鼈甲板にて作り、鬘の毛を止むるに用ふ（中略）寧ろ装飾品なり」とある。

貴金属で作られるようになったのは明治末期からで図1-8-75はその頃の広告。18金製のたぼ留を日本髪用の平打簪といっしょに宣伝している。このようなたぼ留が、大正時代になっても用いられていた。

根掛とともに、たぼ留も今では忘れられた装身具の一つである。

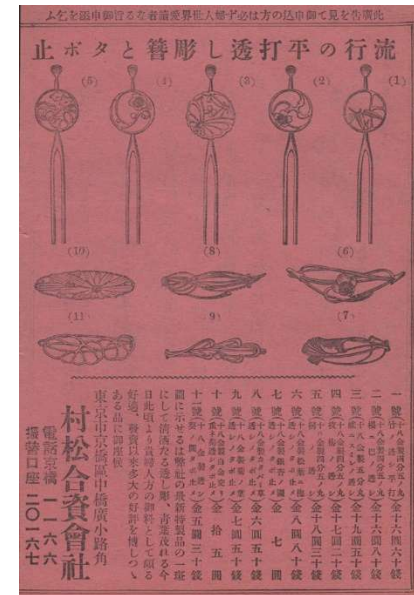


図 1-8-75

平打簪とタボ止（たぼ留）広告

村松合資会社

明治 44 年 6 月 『婦人世界』

下图 6 点がたぼ留。